

# 海上自衛隊の任務と役割

## 「3.11大災害」と海上自衛隊

文 平間洋一(元防衛大学校教授)

### 冷戦後の新しい役割

冷戦構造が崩壊すると冷戦中は押さえられていた国境紛争、民族紛争や宗教紛争が多発し、1991年にはイラクがクエートに侵攻したが、イラク軍は米国を中心とした多国籍軍に撃退されクエートは併合を免れた。しかし、クエート沖にはイラクが敷設した1200個の機雷が残され、この機雷を米英独仏伊など9か国が共同で掃海することになり、日本からも掃海部隊が乱立する赤旗と「海外派兵反対」のシュプレヒコールに送られてペルシャ湾に向かった。これは海上自衛隊初の海外派遣の実務であった。当時、米国では帰国した兵士はワシントン市内を行進し、ブッシュ大統領は「諸君は米国の誇りである」とねぎらった。しかし、日本では自衛隊の最高指揮官の海部俊樹総理から軍国主義のイメージを与えるので、帰国時に自衛艦



横須賀に保存されている「記念艦三笠」の錆落としとペンキ塗りの奉仕をする、アメリカ海軍・空母「ニミッツ」の乗組員たち。ネイビーシップは国を超えて尊敬の気持ちを育んでいる。

旗を降下し軍艦マーチは演奏しないように、との意向が伝えられた。ペルシャ湾に派遣された隊員は、このような国家指導者の命令で188日間も灼熱の海で危険な任務につき、「国際国家日本」のために働いたのであった。

しかし、派遣された掃海部隊が国際的な賞賛を受けると、軍事面での国際貢献についても多少は国民の理解が進み、1992年には「国際平和協力法」を成立させ1200名余の陸上自衛隊員をカンボジアに派遣するなど、ペルシャ湾派遣掃海部隊が軍事的国際協力への道を開いた。96年4月には「21世紀に向けての同盟」が宣言され、対米支援策を具体化するため97年に「新ガイドライン」が合意され、日米安保体制は一段と強化された。

2001年11月9日には「テロ対策特別措置法」に基づき給油部隊がインド洋に派遣され、12月7日の真珠湾60周年記念式典でブッシュ大統領は「日本国民に対し心か

ら感謝する。今日、両国海軍が肩を並べてテロとの戦いに従事している。60年前の苦々しい過去は消え去り、太平洋戦争は今や歴史の一コマとなった」と演説するほど日米同盟は進化した。

### 新冷戦と「臥薪嘗胆」

1999年3月には能登半島沖の不審船に対して、初めて海上警備行動が発令され、武器が初めて使用され「周辺事態安全確保法」が成立した。北朝鮮のテポドンミサイルの発射や核ミサイル開発疑惑にはイージス艦が国防の第一線に立った。さらに2001年の「9.11テロ」以降の世界情勢の変化に対応するため、04年には「新防衛大綱」を決めた。この新大綱では半世紀にわたり踏襲されてきた\*1基盤的防衛力構想を捨て、「わが国自身の努力」「同盟国との協力」「国際社会との協力」を3本の柱として国の安全を図ることとされた。しかし、2009年1月には政治の混乱からパキスタンで戦っている有志国連合へのインド洋給油作戦から撤退してしまった。インド洋での給油活動中止は「中国重視、日本軽視」が強まっている米国の日本離れを加速し、日米安保体制の信頼性に亀裂を生んだ。一方、政府は「格段と厳しさを増す財政事情」から「一層の効率化、合理化を図り経費を抑制する」として防衛費を9年間も削減し続け、護衛艦は60隻から47隻に、固定翼哨戒機は220機から178機に削減されてしまった。

さらに、政権が民主党に変わる

と「改めて法律を調べてみたら、自分が自衛隊の最高指揮官であることが判った」という防衛音痴の管直人最高指揮官に変わり、側近の出戻り副官房長は自衛隊をレーニンの革命用語の「暴力装置」と侮蔑し、直接指揮する防衛大臣は、旧軍と自衛隊の違いも判らない歴史音痴で、自衛隊のクーデターを猜疑し「旧軍の轍を踏むな」とことある毎に訓示していた。

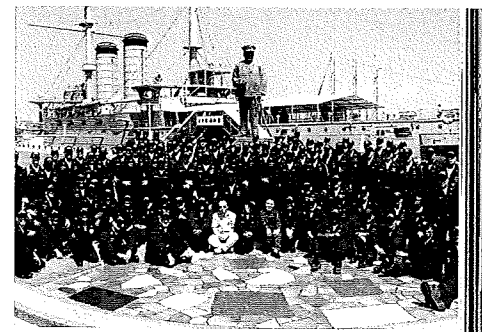
軍隊の戦闘力は兵器の性能と運用(使い方)、隊員の士気の相乗積で決まるが、愛する家族と別れ戦地に赴き、命令ならば死を覚悟して弾の中に飛び込まなければならぬ兵士の士気や規律は、愛国心で支えられ国民の感謝と支持を受け不動の信念へと高められるのである。また命を捧げる祖国は「誇りある国」でなければ愛国心は生まれない。「侵略国家」と言われる祖国のために、兵士が命を捧げることはできない。しかし、日本では国のために戦い命を捧げた兵士を侵略戦争の先兵であったと、戦死者を貶める首相談話を「政府見解」とし、この政府談話に反したとして田母神俊男航空幕僚長が職を解かれ、自衛官の精神的支柱である「誇りある国」の教育は、「罪深い国を自覚させる教育」に変えられ、自衛官の精神的支柱を骨抜きにするのではと識者は案じていたが、自衛官は「臥薪嘗胆」し、今次大震災では献身的な活動を通して多くの国民から称賛された。

### もう一つの「想定外」と海上自衛隊

政府や関係官庁や会社は今次の災害を「想定外」と逃げたが、この機会に考えなければならないのは、「想定外」の日本有事であり、為政者や国民は「安全安心な社会」とか、「生活第一」と、社会保障を重視し防衛費は4兆6826億円、子供

手当は5兆7000億と子供手当よりも少なく、このため武器は時代遅れとなり、隊員(陸上)は警察官の27万870人の半分強の15万4000人と痩せ細ってしまった。現在の世界、特にアジアは中国の高まるナショナリズムから19世紀の帝国主義の時代に戻ってしまった。この新帝国主義の脅威にオーストラリアやシンガポール、マレーシアなどのアセアン諸国は軍事費を1.5倍に増額し、米国との軍事的協力関係を強化しつつあるが、日本にはこのような動きは全く見られない。自衛隊が今次大震災で活躍したことから、自衛隊が高く評価され期待も高まっているが、現在の憲法や集団的自衛権、官僚組織や法体系では「想定外」の災害にさえ自衛隊が対応できなかったことを今次大震災は教えてくれた。しかし、外国の侵略という「想定外の有事」に対応すべき国家の安全保障も日米同盟の深化も、自衛隊のあるべき姿の見直しや増強などは、埋没されたままである。

今次大震災では、「何でも自衛隊。とりあえず自衛隊」と、政府の失策による「二次人災」の拡大を何とかくい止めたのが自衛隊であった。また、米軍を動かしたのも自衛隊であった。本年5月の記念艦三笠復元50周年記念式典で、第7艦隊司令官バスカーク中將は「ニミッツは東郷を尊敬し、東郷の『勝つて兜の緒を締めよ』を実践し、この精神は現在のアメリカ海軍にも広く根づいています。私は3.11から2か月間、海上自衛隊員の東日本大震災に対する挺身的な働きを見ました。そして、海上自衛官の挺身に動かされたのです」と、祝辞の半分を東郷とニミッツの関係を話し、次いで「友だちオペレーション」に対する米海軍と海上自衛隊との信頼と友誼に多くの言葉を割いた。



東郷平八郎の像を囲んでの記念写真。彼のように世界中の海軍軍人から尊敬されるような日本人は、今後出現するだろうか。

敗戦後に来日し三笠の荒廃を見たニミッツは、三笠復元の必要性を『文藝春秋』に投稿し、米海軍もLST1隻をスクラップとし2300万円と、軍人や家族も100万円を寄付した。日本人の寄付が8100万円であったことを考えると、「三笠」は東郷元帥を崇拝し、帝国海軍を畏敬する米海軍関係者、特に日本海軍を敗北させたニミッツにより復元されたと言えるのではないか。昨年6月に原子力空母「ニミッツ」が横須賀に寄港すると、乗員が三笠の錆落としとペンキ塗りの作業を行った。このNavy-to-Navyの日米関係は帝国海軍が築き上げた最高の遺産であり、日本防衛の最大の保険ではないだろうか。

61年前の朝鮮海域への\*2航路啓開隊の出動が、サンフランシスコ講和会議を有利に導き、日米安保体制を確立させて戦後66年の平和と繁栄をもたらしたが、ペルシャ湾への掃海部隊の派遣は日本を「一国平和主義国家」から「国際平和主義国家」に変え、日米同盟の絆を強化した。今次の大震災では「想定外」の災害だけでなく、尖閣列島への上陸占領という「想定外」の防衛にも兵力を割きつつ、米国の災害派遣部隊と連携し日米同盟の絆の強さを示し、日本の安全保障にも大きく寄与した。このように海上自衛隊は日本の針路を示し、日本の安全保障や外交の先頭を走り続けてきた。この自負を胸に海上自衛官の諸兄姉は頑張っ